

印度の宗教（中）：雑録

著者	巴城生
雑誌名	龍南會雜誌
巻	42
ページ	15-20
発行年	1895-12-26
その他の言語のタイトル	印度の宗教（中）：雑録
URL	http://hdl.handle.net/2298/4751

是時に當り崇佛に熱心なる帝皇は出で玉へり佛道に達せる大智識ハ出でたり神佛調和説ハ創められ
たり調和説とは何ぞ本地垂跡の論なり此論一たび出で、傳教弘法兩大師之れを後に傳へ兩部神道説
となり神は佛の權現説となり鎌倉室町兩幕府を經戰國亂離の世を通じ徳川の世を終る迄千有余年神
佛混合説は依然國郡に行はれて所謂社僧と稱するもの概えて神事に供せり請ふ試みに其説の由來を
釋ん(未完)

雜 錄

印度の宗教 (中)

巴 城 生

前篇吾人は今や印度の宗教の教理即ち印度人民の信仰個條を探究すべき位地に達せり。されば其概
略を總括して、次に之を批評することとせん。

(一) 惟一神 アツヤン人種の祖先の中にて、歐羅巴に在りしものと亞細亞にありしものとは、大に
その境遇を異にし、從て其風習觀念に著しき差を與へたり。亞細亞にありしものは、神の力天然に表
現せるものと考へき。蓋之土地家屋家畜人間動物等風雨水火の恩恵に浴すること甚だ多く、太陽の光
線の如きは、殊に人心に勢力を有せり。さればこそ、印度人民ハ惟一神と他諸神とが、相競争奮闘して
這般天然現象を活現するものなりと信せるなれ。彼等は惟一神に形骸属性等を附與えて、之を具體的
に解釋し、近く可らざる神として禮拜せる、毫も怪むに足らざるなり。凡そ原始時代に於ては、宗教的
觀念を具體的に解釋せんとするは普通の現象にして、印度にても、苟も勢力ある天然力には、各之を

神性あるものと云、空氣雨暴風太陽火等皆之を鬼神視せり。要するに、勢力ある神と云て考へられしものは、多くは天空に現出せるもの。思ふに、此等も最も多く人々の耳目を聳動するより、起り來れる結果なるべし。

韋陀經の中には、惟一神に關する信仰あり。即ち惟一自立の存在者にして、*オアサス*といふ是なり。『天空』の義なり。又讚誦經に *デイオアサスピタル* に捧げたる祈禱文あり。此神は希臘の *オアサス* 神、羅馬の *ジニピタル* 神と全じく、皆な『天の父』といふ意なり。韋陀經の最も古き經文の中には、神の惟一に就て明示せるふし少なからず。例へば、

我等は犠牲を以て、いかなる神をかあがめん。我等の神は世の創めに起りし黄金の幼兒なり。主なる神にまて、世界惟一の主宰なり。彼は天と地を造り、生命を與へ、活力を與ふ。その命命は畏れまめ、その潜む處は即ち不滅の存する處、その影は即ち死のある處。彼はその力によりて王となり、諸の呼吸し、睡眠し、活動せる世界を支配するなり。到る處に漫々たる水をやり、菓實多き種子を蒔き、生殖の力ある火焰を置く。彼は即ち諸神の氣息、諸神の生命にして、その威勢ある瞥見ハ、空漠なる濕氣の蒼穹の周圍に顯はる。あゝ、彼はげに勢力の本源にして、諸神の上に位する惟一の神、犠牲を供ふべき主にぞある。

といへるが如き、或は又次の如く、

彼は世界惟一の主神にして、天地を充ち、生命と活力を與へ、諸神の上に位し、その影を死と不滅とのある處とせり。

霜おける山、浪高き灘、限なき空は、皆なその能を表はさぬはなま。

天と地とは彼の前には畏れ震ふなり。彼は諸神の上にある神なり。

といへるを以て之を推すも、彼等人民の惟一の神を信せること知るべきなり。然れども此至大なる惟一神は吾人を距る甚だ遠く、禮拜するに由なきものと思はれたり。プラプラムと稱する聖徒セイヂは云ひけらく、

彼は識り得べく、また識るべからず。言語にて表はす能はざるもの、心にて悟る能はざるもの、目にて視るべからざるもの——即ち梵天王プラムなり。彼は小さなく、量なく、性情なく、部分なし。賢者ハ

彼を考へて、空間に類似せる大精神なりと云ふ、又彼は熟睡せる者に類似せるものとせり。二凡神教之を要するに、以上の信念と凡神教との距離は、唯だ僅かに一步のみ。而して此一步の

差は終に除去せられたり。蓋し是れ冥想的人民の歸着せざる可らざる點たり。宗教家ハ梵天を言て曰く、「惟一の永劫絶対不變なる存在者にして、創造者として宇宙を充し、或は太陽及び太陰の光となり、或は火焰その他總ての光体の光となり、總ての光の光となり、或は空中の音響となり、或は地主の香氣となり、或は万物の不滅の種子となり、或は万物の生命となれり。又彼は善の善なるもの、始にして申なるもの、而して又終なる者なり。彼は永遠なる者にして、萬物の物の生なり、死なり。」又曰く、「萬有何物か是れ梵天王にあらざる。試みにこの世界を觀せよ。その始まるや、必ずこゝに於てしをの終るや、必ずこゝに於てし、その生息するや、亦必ず此に於てするを見るべき、その体は即ち精靈、其形は即ち光明、其考ふる所眞ならざるなく、その性は宇宙一切の處に遍からざるなし。天下にありとあらゆるもの之より來らざるなく、我が心裡の眞我亦之によかて成る。其小をいふ時は、則ち一粒の米よりも小にして、芥子よりも微なり。若しその大を論せば、世界よりも大にして、蒼穹よりも高

し、森羅と萬象とは一として之を兼包ますといふことなし。而も彼は一言の語る所あるなく、又一念驚く所あるなし。我が心裡の眞我も亦是梵天にして、我れ一たび幽界に去るや、必ず之に復歸するなり。』若夫れ一言にて之を表せば、『彼は惟一の神にして、彼の外に何物も實在せず、』といふに全じ。彼等の信する所によれば、萬物は幻象なり。人類の靈魂は梵天王の發現にきて、梵天は即ち宇宙自在の大精神なり。靈魂は此中心の火より發せる火花にして、終には中心の火に復歸するなり。人類の生命行爲は、魔法家が現示して宛ら實物らしく見えしむる、幻影的現象に過ぎず。又迷夢の現象と差あることなし。

我等の生命は蓮葉の上に震動せる滴露の如き。しばしも定まることなく、忽ち散り失せぬべき。ど、婆羅門人民に行はるゝ諺の一なり。實に梵天に合體することは、人生の歸趣なりとせること、以て知るべきなり。韋陀經にて、凡神教的思想を表はせる節に曰く、

(一) この大精神ハ千の頭と、千の目と、千の足を有せり。彼は即ち此宇宙なり。彼は今あり、後あり、又前ありたるもの。彼は即ち不滅の主にきて、その四分の一は總ての動物にして、その四分の三は天に在る不滅者なり。

優波尼沙土經の中には、婆羅門教の凡神教的教理の例として適切のものあり。曰く、

この宇宙間にありとあらゆる者は、皆大能の主なる神の覆ふ所なり。その惟一の存在者の宇宙に
一 ある、靜止して動くことなく、動くこと心よりも迅き。遙かに感覺に超越し、空氣の如く、總ての
精氣の活動を保持す。彼は活動す、而も活動せず。彼は悠遠なり、而も接近せり。彼は宇宙の裡に
あり。總ての動物を見る者は、皆彼れ大精神を見るが如くあれ。努め動物を輕視する勿れ。

聖徒アンヤラス教を説て曰く、

善業の人は必ず善を得、悪業の人は必ず悪を得、純なるものは純を得、雜なるものは雜を得。人或は吾人は欲より成るといふ。意は欲に従て行ひ、業は意に従て成る。この故に、蒔くものありて而して後收むるものあり。因果の理は到底吾人の免るべきにあらずと雖も、而も塵界の欲望を超脱し、宇宙の眞我と冥合する時は、行と志と活潑々地の大精神たらざるはなし。我軀は百歳の後必ず腐らざる可らざる者なりと雖も、梵天王は獨り萬世に亘りて朽ちず、滅びず。光を日月と争ふ。凡神説は優波尼沙土に至りてその頂上に至れるものと謂ふべき。教授ウリアムスの優波尼沙土を論じて云へる如く、これは實に前代の教説と後代の哲學系統とを連ぬる鉄鎖なり。前代の信仰を主とするが故に、儀禮に關する繁縟あれども、その説く所に至りては、驚くべき思想、創始の觀念、高尚深遠なる言句尠なからざるものありて存するを以て、之を觀れば、優波尼沙土は既に神秘説を脱出せるものとなすべし。而してその無限を説き、又は是よりして萬有の發生する所以を論ずるは、プラトンの觀念を説き、又その作用を論ずると較すべく、又クエカル宗の教義のこれと酷に相似たるに比すべきなり。

之を要するに、今若し此凡神教的教理を以て、他の宗教に比較すれば、その宗教は、(一)神と靈魂との間に至要なる區別を立てず、(二)救世主と稱するが如き仲保者存在せず、又存在する必要もなし。従て(三)罪惡と正義との間に、必要にして且つ不變なる區別なし。又幻象の教義あるが故に、自覺の確實なること拒否するを得べく、又終に懷疑に陥るに至るべし。是に於てか人智の基礎動搖し、眞理といひ、罪過といふも、其區別は空無に歸し了りぬべし。斯の如く、其教ゆる所は實に高尚にして、且つ悠遠なる

ありと雖も、やゝ之を疑ふ者も生じ、且つ俗身に入り難き教説は、普く天下に及ばず。勢ひ人民はこの説を遠け、こゝに一層接近し得べき神を要むるに至れり。又古代の經典に於て既に多神の所説を萌芽せるが故に、忽ちにし冥想的哲學、凡神教的教義は多神教的教義と變じぬ。彼等は「若し神に去て總ての物ならば、總ての物は亦神たるべきこと明ならずや、」と考へぬ。「梵天王は實に睡眠の狀態にあるか。之に祈禱を捧げてはた何の効ぞある。彼にして吾人を距る遠く、且つ目以て視るべからずとせば、普く之を措きて、茲に間近き山川草木禽獸を禮拜せよ。そは吾人は禮拜せざるべからざるものなればなり、」とは印度人民の意向なりき。是に於てか、驚くべき數の諸神は、印度人民の禮拜する所となりき。

伯夷頌を讀む

大野禎二

伯夷の頌一篇、その由来を詳にせず。然れども文王拘れて周易を演べ、仲尼厄して春秋を作り、屈原放れて離騷を賦す。徹徹た一篇の文と雖も、その出づるや、必らず故なくんばあらず。韓文公、絶世の奇才と滿腔の熱血とを揮て、國家百年の大計を爲さんと欲す。無學の徒、これを毀り、斗筭の人、これを嗤ふ。是に於て、奮然起て筆を下す。伯夷頌一篇、蓋是なり。層々行文の間、その自信と本領との、滔々として流露するを見る。請ふ、暫し、余をして彼が自信と本領とに就て語らしめよ。

彼が自信

骰子を投じて、これをその前方より望み、その二なるの故を以て、六面皆二なりといふ非なり。之